

# 福岡県小郡市大保横枕遺跡の年代学的調査

弥生前期の二重環壕を備えた集落の年代

Chronological Research of the Ohoyokomakura Site in Ogori City, Fukuoka:  
the Chronology of the Double-moated Settlement in the Early Yayoi Period

FUJIO Shin'ichiro, YAMASAKI Yorito and SAKAMOTO Minoru

藤尾慎一郎・山崎頼人・坂本 稔

## I 調査の概要

藤尾は小郡市埋蔵文化財調査センターの山崎頼人と協議のうえ、弥生前期前葉～前期末（板付Ⅰ式新段階～板付Ⅱc式）に比定された福岡県小郡市大保横枕<sup>おほほよこまくら</sup>遺跡<sup>2</sup>の調査によって出土した土器24点の付着炭化物をAMS-炭素14年代測定するために、2011年3月22日と9月14日の2日にわたって試料を採取した。なお9月の調査では歴博外国人研究員の李昌熙氏の協力を得た。

本遺跡から出土した如意状口縁甕と突帯文土器に付着した炭化物9点をAMS-炭素14年代測定したところ、前700年前後に居住がはじまり、前7世紀前葉に環壕が掘られ、前5世紀前半まで機能し、前5世紀後半には環壕が埋没していたことが明らかになった。

弥生前期前葉～後半といえ、いわゆる炭素14年代の2400年問題といわれる、較正年代を絞り込めない時期に相当する。したがって通常、統計的には300年ぐらいの時間幅までしか絞り込むことができない。しかし本遺跡の試料はすべて遺構に伴っているため、遺構内の出土状況や遺構間の重複関係を利用して、較正年代を絞り込むことができた点に意義がある調査となった。正確な発掘調査によって得られた精緻な発掘所見を利用することによって、板付Ⅱa式に該当する2400年問題の時期を2つの時期に大別することができたことは注目できる。

また今回の測定によって、これまで例数が少なかったため存続幅を絞りきれなかった板付Ⅱa式と板付Ⅱb式の存続幅の精度を少し高められたことも、本調査の重要な成果である。なお、本調査は、国立歴史民俗博物館基幹研究「農耕社会の成立と展開」（2009～2011、藤尾研究代表）の一環として重点配分経費の交付を受けて実施した成果の一部である。炭素14年代測定、同位体比分析は共著者坂本稔が行った（藤尾・山崎）。

## II 測定した遺跡の概要と土器の考古学的特徴

### 1 遺跡の概要（図1）

大保横枕遺跡は、宝満川から西へ約500mの自然堤防上に造られた弥生時代前期の二重環壕、貯蔵穴、住居からなる遺跡である。板付Ⅰ新式～Ⅱa式古段階から営みが始まり、環壕が造られ、板

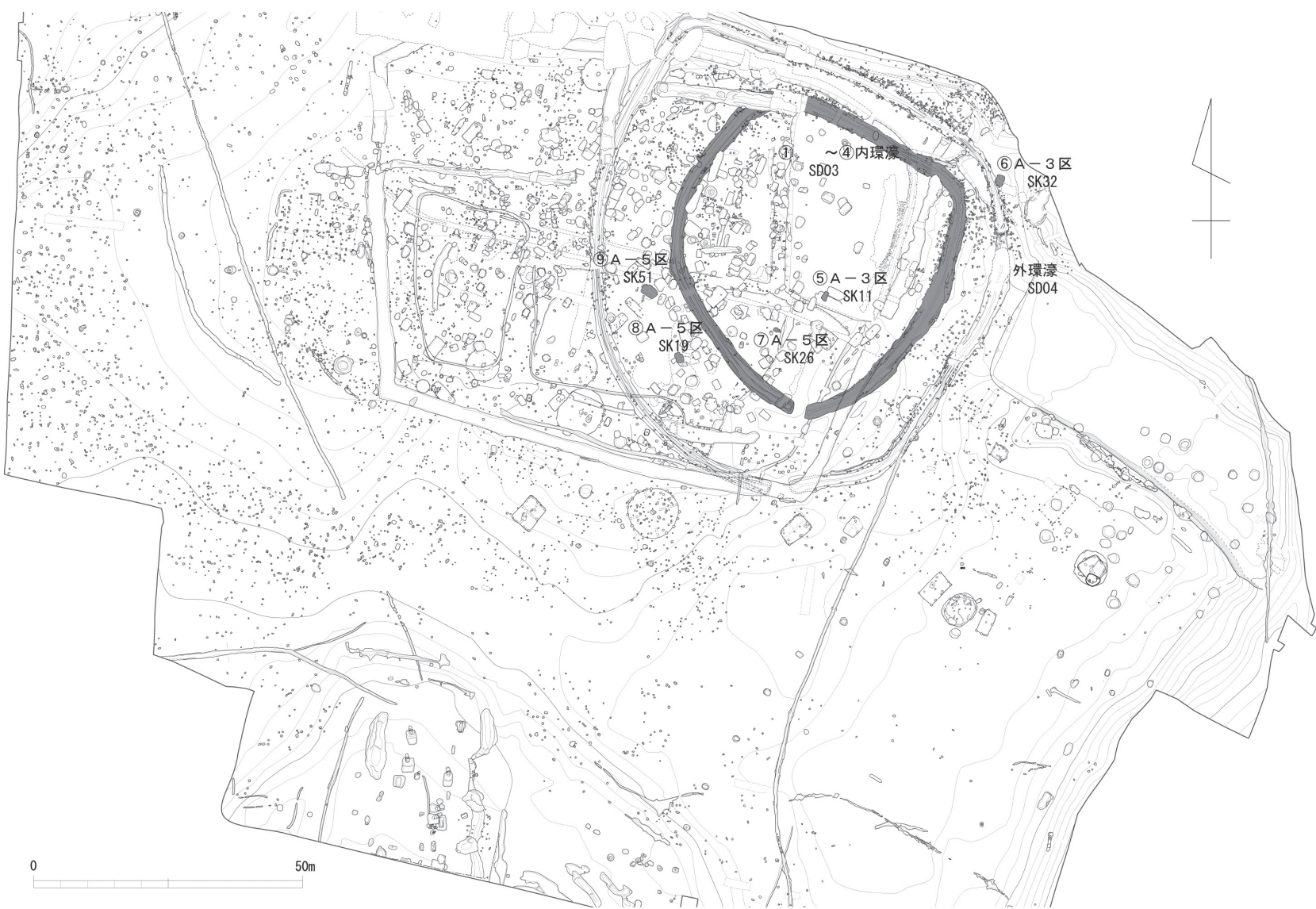


図1 大保横枕遺跡遺構配置図〔山崎編 2012〕より転載)

付Ⅱb式期まで環壕が機能し、板付Ⅱc式段階には環壕が埋没したことが、発掘によって明らかにされている。小郡市地域では低地部で見つかった初めての環壕で、環壕内にはわずかな住居しか認められないという、貯蔵穴型の環壕という点で三国丘陵上の遺跡と同じ傾向を見せる。

#### ① 二重環壕

内環壕は板付Ⅱa～Ⅱb式新に比定され、54.8 × 53.4mの規模をもつ。溝の最大幅は4.12m、最大深さは1.96mである。外環壕は板付Ⅱa～Ⅱb式新に比定され、79.6 × 78.8mの規模をもつ。溝の最大幅は3.4m、最大深さは1.65mである。いずれも平面形は、野球のホームベース型に近く、北側の地形に制約された結果と考えられている。

断面形は内環壕、外環壕ともV字～逆台形で、湧水が激しいことから、V字にできない場合は逆台形になるという山崎の所見がある。

環壕の法面周辺には多くのピットがみられ、特に外環壕の方が顕著である。出入り口は外環壕に2ヶ所（南と北東）、内環壕に1ヶ所（南）あり、いずれも掘り残して陸橋としている。

二つの環壕の時間的關係だが、遺構間接続時の存在からも同時に機能していた時期のあることがわかっている。

#### ② 環壕内部の遺構

内部には住居跡、貯蔵穴跡、土坑・ピット跡が見つかっていて、なかでも最も多いのが貯蔵穴である。住居の可能性のある堅穴が内環壕内に2軒あり、板付Ⅱb～Ⅱc式に比定されている。内・外環壕間にも1軒、外環壕にきられ、板付Ⅰ新～Ⅱa式に比定される堅穴がある。

#### ③ その他

土壘が存在したかどうかはわからない。環壕法面周辺のピットは土留めか、乱杭か、逆茂木の可能性が指摘されている（山崎）。

### Ⅲ 試料の採取

資料は内環壕内、内環壕内部の土坑から出土したもので、残念ながら外環壕や住居跡出土の資料は測定値を得ることはできなかった。試料は20点の土器から24サンプル採取したが、測定値を得ることができたのは9点である（表1）。以下、炭化物を採取した土器の説明を行う。FKOYとは、FuKuoka OhoYokomakura 遺跡の略称である。

① (FKOY-1) 内環壕下層から出土した板付Ⅱa式の如意状口縁甕である。口唇部刻目が完全な下端刻目になっていない。刷毛目調整は行われておらず、研磨具による丁寧なナデ調整で仕上げている。胴部外面上位にススが厚く付着していたので試料とした。

② (FKOY-5) 内環壕南東コーナーのベルト部（層位不明）から出土した板付Ⅱb式の如意状口縁甕である。口唇部の刻目は全面だが浅く狭く形骸化している。胴部内面下位～底部の煮焦げを試料とした。

③ (FKOY-6) 内環壕コーナーベルト部下層から出土した板付Ⅱa式新～Ⅱb式古の如意状口縁をもつ。甕というより鉢に近い。口縁部外面下にススが厚く付着していたので試料とした。口唇部は方形に面取りされている部分とされていない部分が混在していた。

④ (FKOY-7) 内環壕中層から出土した如意状口縁甕で、面取りをしない口唇部に大ぶりの全面

表1 大保横枕遺跡の弥生前期土器付着炭化物採取場所(括弧内は藤尾の時期比定)

資料番号	出土地点	型式	炭化物の付着部位
① FKOY-1	2A-3区 内環壕 SD3A 区下	板付Ⅱa式	胴部外面上位
② FKOY-5	2A-4区 内環壕 SD3A/B ベルト土器 A	板付Ⅱb式	内面胴部下位～底部
③ FKOY-6	2A-4区 内環壕 SD3 ベルト下	板付Ⅱa新～Ⅱb古	口縁部外面下
④ FKOY-7	2A-4区 内環壕 SD3 B区中	板付Ⅰ式新～Ⅱa式古	口縁部外面下
⑤ FKOY-11	2A-3区 内環壕内 SK11	亀ノ甲Ⅱ式	胴部外面中位
⑥ FKOY-13	2A-3区 SK32 (外環壕に切られる)	板付Ⅰ式新～Ⅱa式古	胴部内面下位
⑦ FKOY-14	2A-5区 SK26 内環壕内土坑	板付Ⅰ式新～Ⅱa式古 (板付Ⅱa式)	胴部外面上位～中位
⑧ FKOY-15	2A-5区 SK19 上層 環壕機能中の土坑	板付Ⅱa式新 (板付Ⅰ式新～Ⅱa式古)	口縁下外面
⑨ FKOY-17	2A-5区 SK51 (内環壕と外環壕の間、環壕機能中)	板付Ⅱa式新 (板付Ⅱa式古)	胴部外面中位

刻目をもつなどの古い特徴もつ。また刻目自体も突帯文風の特徴を持っている。今回測定した中でもっとも古い特徴を持つ甕である。板付Ⅱa式古またはⅠ式新と考えた。口縁部外面下のススを試料とした。

⑤ (FKOY-11) 内環壕内のSK-11から出土した土器で、今回測定した中では唯一の前期突帯文系甕である。内環壕が埋没する以前に使われていたという発掘所見がある。口縁部突帯の大きさがまだ大型化していないので、亀ノ甲Ⅱ式(板付Ⅱb式併行)に比定した。胴部外面中位に付着したススを試料とした。

⑥ (FKOY-13) SK-32から出土した如意状口縁甕である。全面刻目だが、細く浅く刻まれているので板付Ⅰ式新～Ⅱa式古に比定した。胴部内面下位の煮焦げ状の炭化物を試料としたので、海洋リザーバー効果の影響の有無をみたかったが、残試料がないため $\delta^{13}\text{C}$ の測定はできなかった。

⑦ (FKOY-14) 内環壕内にあるSK-26で、内環壕掘削以前に作られた土坑から出土した如意状口縁甕である。藤尾は板付Ⅱa式、山崎は板付Ⅰ式新～Ⅱa式古に比定し、評価が分かれた。遺存状態が悪く摩滅が激しい。胴部外面上位～中位のススを試料とした。

⑧ (FKOY-15) 環壕が機能中に造られた土坑であるSK-19から出土した如意状口縁甕である。口唇部全面に端正な弥生的な刻目を施文することから、板付Ⅰ式新～Ⅱa式古に比定したが、山崎は上層の土器と接合したという層位的な事実を重視して板付Ⅱa式新に比定し、評価が分かれた。口縁下外面のススを試料とした。

⑨ (FKOY-17) 内環壕と外環壕の間に位置し、環壕機能中に造られた土坑であるSK-51から出土した折衷甕である。口縁部の外反が弱く、器形自体が湾曲気味なので、突帯文系土器が口縁部を外反させたと理解して板付Ⅱa式古に比定したが、山崎は伴った壺が板付Ⅱa式新だったことを重視して、板付Ⅱa式新に比定して評価が分かれた。胴部外面中位のススを試料とした。

測定結果は表2のとおりである。炭素14年代値を見る限り、2500<sup>14</sup>C BP台の測定値を示した①、②、⑦、⑨以外は、いわゆる炭素14年代の2400年代問題に相当する2400<sup>14</sup>C BP台であった。板

表 2 炭素 14 年代測定の結果

番号	測定機関 番 号	炭素14年代 ( <sup>14</sup> C BP)	較正年代 (cal BC)	確率密度 (%)	炭素同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)	窒素同位体比 $\delta^{15}\text{N}$ (‰)	C/N比 (mol/mol)
①	PLD-19945	2595 ± 25	810-766	95.4	残試料なし：未測定		
②	PLD-19949	2575 ± 20	764-680	31.6	-26.7	5.02	15.6
			674-506	60.1			
			462-450	1.2			
			440-417	2.5			
③	PLD-19950	2490 ± 25	768-521	95.4	残試料なし：未測定		
④	PLD-19951	2475 ± 25	766-506	92.6	残試料なし：未測定		
			461-451	0.8			
			440-418	2.0			
⑤	PLD-19955	2430 ± 25	744-688	16.1	-27.2	10.3	20.6
			664-647	3.6			
			550-404	75.7			
⑥	PLD-19957	2495 ± 25	770-536	94.5	残試料なし：未測定		
			530-523	0.9			
⑦	PLD-19958	2580 ± 25	806-760	90.2	-26.7	8.48	17.4
			683-671	5.2			
⑧	PLD-19959	2475 ± 25	766-506	92.6	残試料なし：未測定		
			461-451	0.8			
			440-418	2.0			
⑨	PLD-19961	2540 ± 20	796-746	43.3	-26.5	11.7	24.3
			690-664	20.3			
			646-551	31.7			

付Ⅱc式（前期末）併行の炭素14年代値である2300<sup>14</sup>C BP台の測定値を示したものはなかった。これまでの研究では、板付Ⅱa式は前700～前550年、板付Ⅱb式は前550～前380年という存続期間があきらかにされている〔藤尾2009〕。

したがって、山崎が3期に分けて復原する本遺跡の形成・廃絶過程にあわせて、9点の土器を出土層位と型式学的な特徴から2大別した。山崎は共伴土器も含めて遺構の時期を幅をもって捉えるため、山崎との間で時期比定が異なった土器については、とりあえず山崎が根拠とした層位学的事実を優先させた。

まず、環壕が掘削される前に位置づけられるのが④（内環壕ベルト中層）、⑥（SK-32）と⑦（SK-26）で、板付Ⅰ式新～板付Ⅱa式に位置づけられる。これが大保横枕遺跡第Ⅰ期である。

次に、環壕機能中のものが、①、②、③、⑤、⑧、⑨で、板付Ⅱa式～板付Ⅱb式に位置づけられる。これが第Ⅱ期である。①～③が環壕内出土、あとは土坑出土のものである。この時期、環壕外には竪穴住居が6軒見つかっているところから、これらの土坑は、竪穴住居の貯蔵施設であった可能性がある。

この6つはさらに、型式学的に板付Ⅱa式①、Ⅱa式新⑧・⑨、Ⅱa式新～Ⅱb式古③、Ⅱb式②⑤の4つに細別できる〔藤尾・坂本〕。

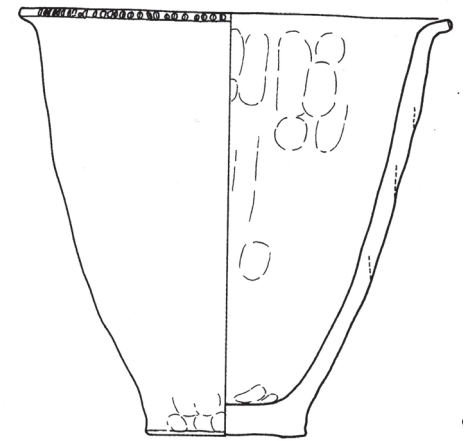
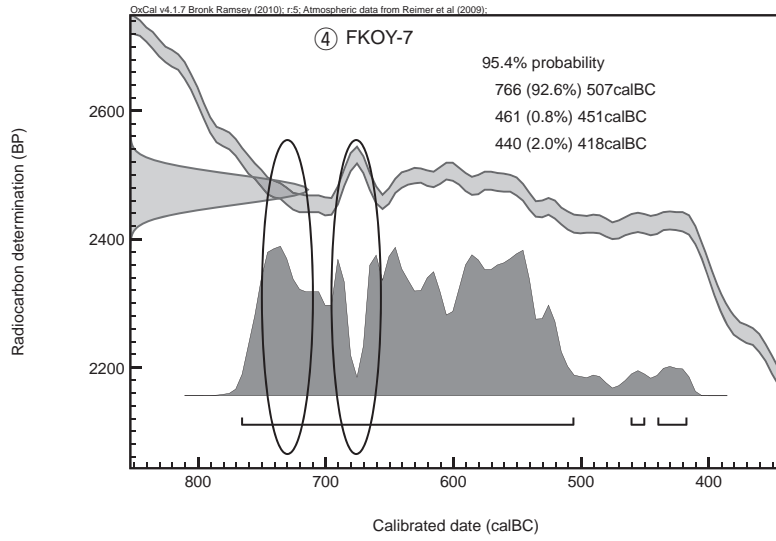


図2 較正年代と土器実測図 (I期)

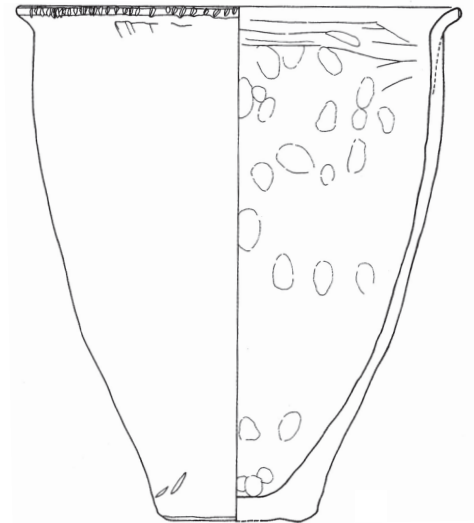
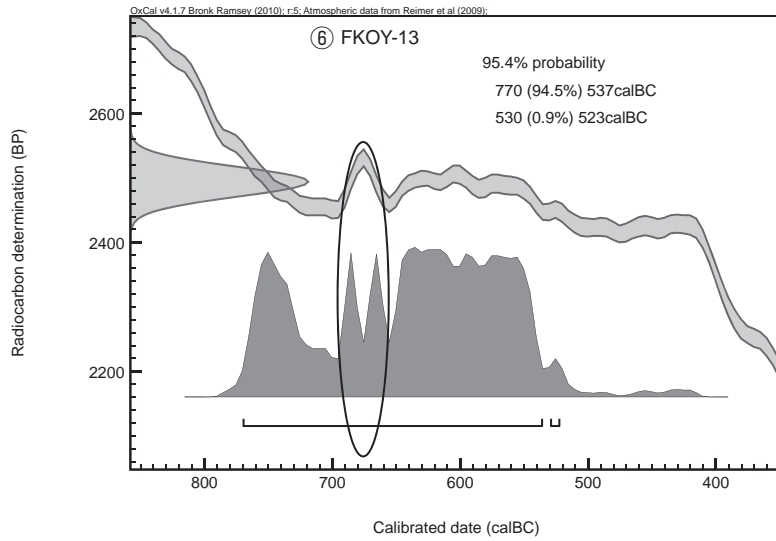


図3 較正年代と土器実測図 (I期)

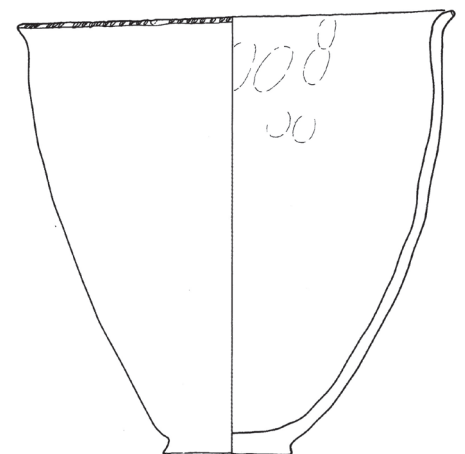
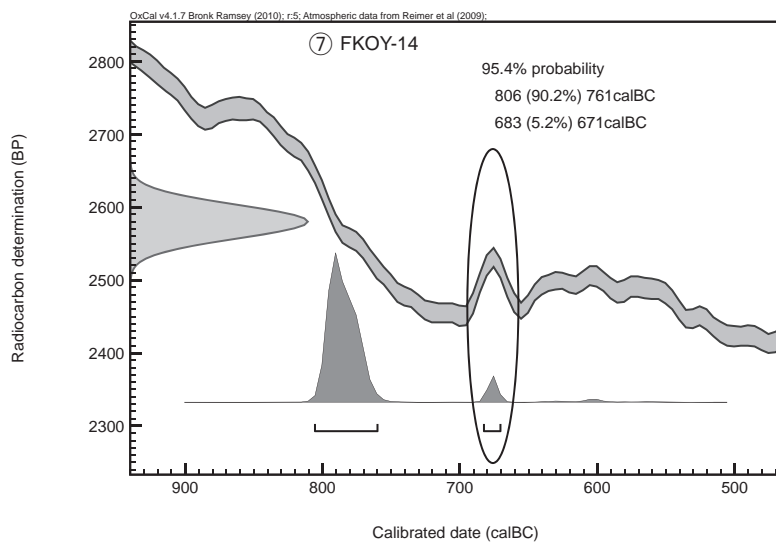


図4 較正年代と土器実測図 (I期)

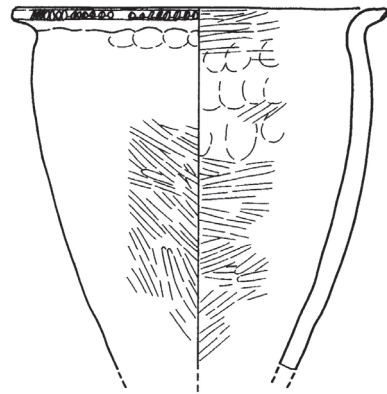
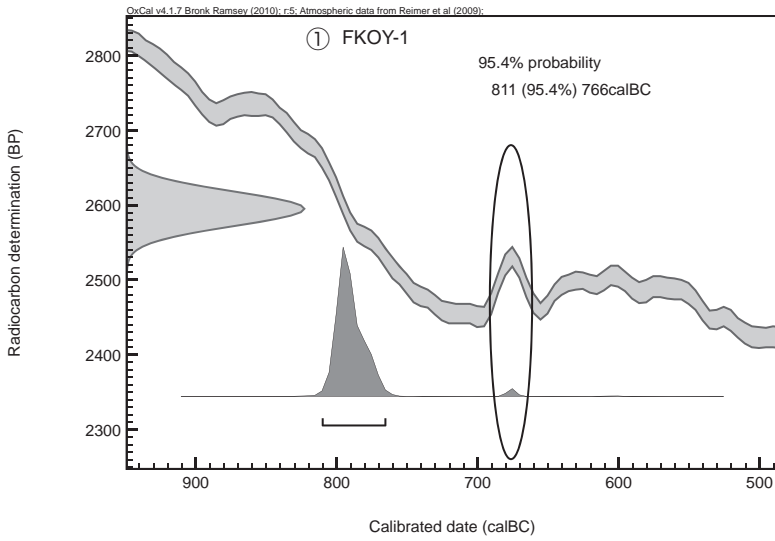


図5 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)

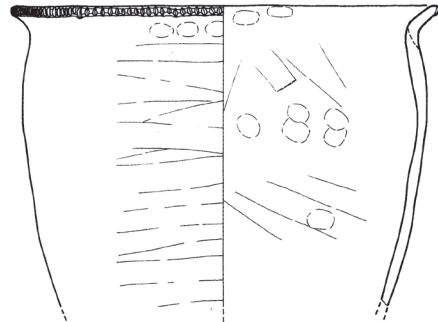
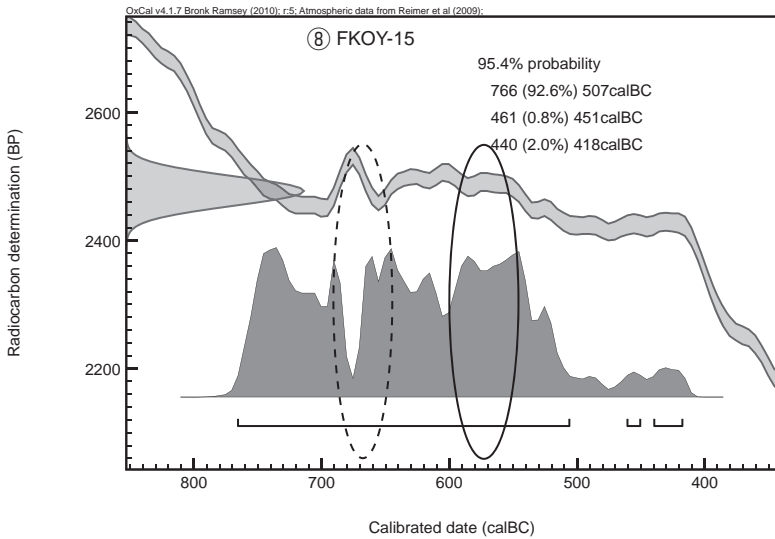


図6 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)

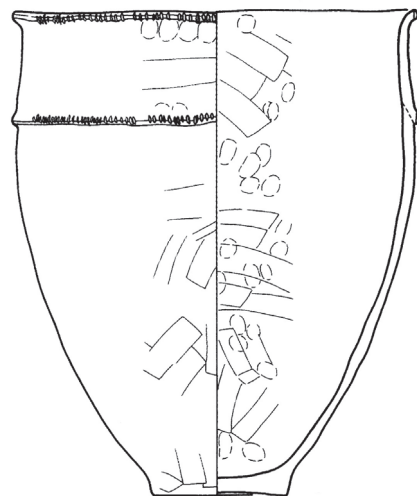
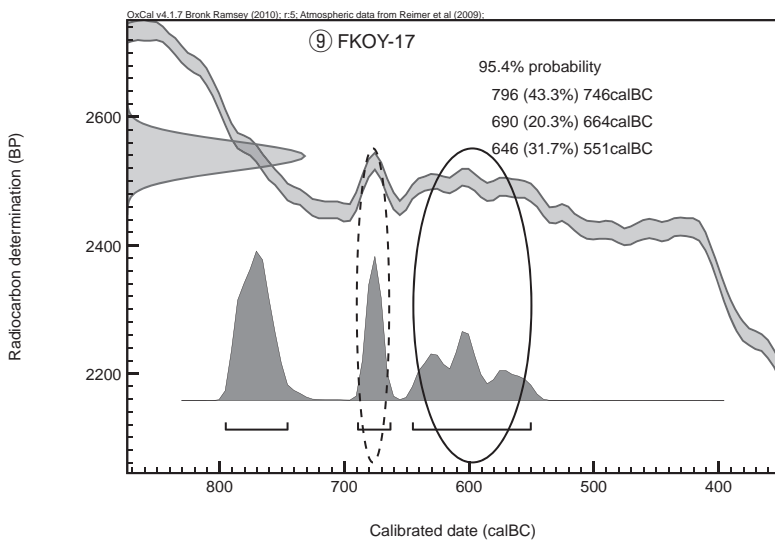


図7 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)

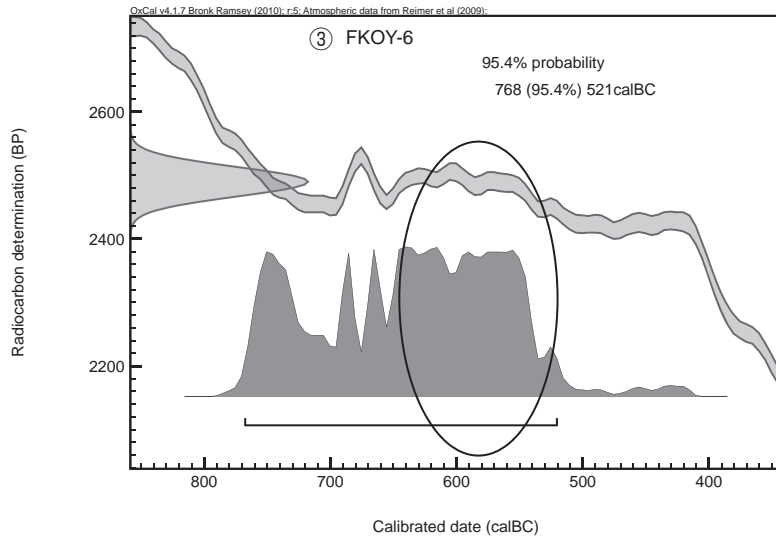


図8 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)

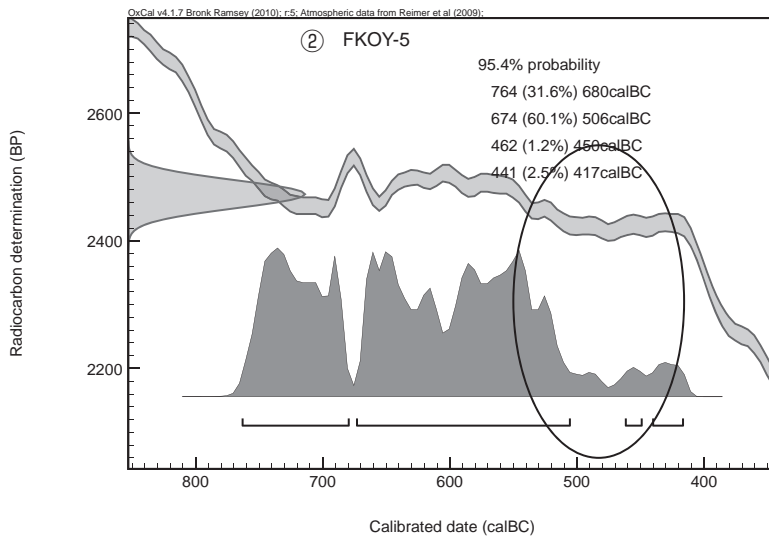


図9 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)

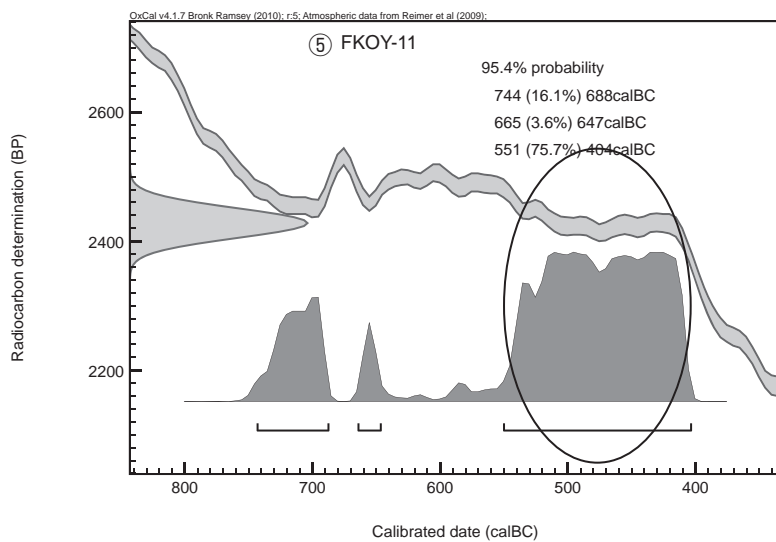


図10 較正年代と土器実測図(Ⅱ期)



## IV 較正年代

それぞれの較正年代を推定してみよう。

大保横枕遺跡から出土した如意状口縁甕と突帯文系甕の炭素 14 年代値を、型式学的な順番にしたがって古い方からの較正曲線上に落として、較正曲線上の位置を求めてみよう。落とすのは中心値をはさんだ 1  $\sigma$  の範囲である。

### 1 第 I 期

まず第 I 期とした板付 I 式新～板付 II 式古に比定した④ (図 2)、⑥ (図 3) と⑦ (図 4) である。④の 2475  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、前 8 世紀後葉と前 7 世紀前葉の 3 ヶ所に存在し、1  $\sigma$  の範囲をみれば前 5 世紀末まで存在する。しかし型式学的にみれば、前 7 世紀以前でしかあり得ないので前 6 世紀以降は無視できる。現状で板付 I 式のもっとも新しい炭素 14 年代値は 2510 <sup>14</sup>C BP で較正年代は 8 世紀後半なので、板付 I 式新～II a 式古の較正年代は、前 8 世紀後葉～前 7 世紀前葉の間であれば問題ないということになる。

⑥の 2495  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、④と同様、前 8 世紀後葉～前 7 世紀前葉の可能性が高い。

⑦の 2580  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、前 780 年付近と前 7 世紀前葉の 2 カ所に存在するが、前 780 年付近は板付 I 式の出現年代なので、本資料の型式学的な特徴とあわない。よって前 7 世紀前葉とした。すると④や⑥の下限年代とほぼ同じぐらいになる。この結果、第 I 期は前 8 世紀後葉から前 7 世紀前葉にかけての約 5～60 年間ということになる。なおこの試料の炭素含有量(重量比)は 37% とやや低く、含まれていた鉱物の影響で古い炭素 14 年代値が出る可能性も指摘しようが、土器型式との関係は整合的で問題はないと考える。

これまで板付 I 式新～板付 II a 式古に比定した如意状口縁甕の炭素 14 年代値は得られてなかったので、福岡平野以外で如意状口縁甕がいつごろ出現するのか、その年代を年代測定によって押さえることはできなかった。しかし今回、前 8 世紀後葉(前 730 年)ごろを上限と考えても問題はない測定値を得ることができたといえる。これによって大分平野(前期突帯文系土器だったので福岡平野の如意状口縁部甕との関係を見るのが難しかった)や西部瀬戸内でもっとも古い水田稲作の開始年代も、板付 I 式新～板付 II a 式古併行、前 8 世紀後葉までさかのぼるという見通しを得ることもできた。これは高知・田村遺跡の前 I-1 とほぼ同時期である。

次に第 II 期とした板付 II a 式に比定したグループである。板付 II a 式に比定した① (図 5) の 2595  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、先述した⑦と同じく、前 780 付近と前 7 世紀前葉の 2 カ所に存在するが、板付 I 式の領域にははまらないこと、I 期とは時期差をもつことを考慮して本資料を前 7 世紀前葉とした。

板付 II a 式新に比定した⑧ (図 6)、⑨ (図 7) である。⑧の 2475  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、前 8 世紀後葉、前 7 世紀前葉、前 665 付近～前 550 年付近など何ヶ所も存在するが、同じ板付 II a 式に比定された①よりも新しい傾向をもつことを考慮して、最後の前 665～前 550 年付近に落とした。藤尾の時期比定である板付 I 式新～II a 式古をとれば前 7 世紀前葉ということになり、①との時期差はなくなる。

⑨の 2540  $\pm$  25 という炭素 14 年代値は、前 8 世紀前半の板付 I 式の領域をはじめ、前 7 世紀前葉、

前600年を前後するあたりなど、やはり何ヶ所も存在する。山崎の時期比定を採れば⑧と同様に前7世紀後半～前6世紀前半に落とすことができるが、折衷甕の古式タイプという藤尾の時期比定をとれば板付Ⅱa式古併行なので前7世紀前葉になる。発掘所見の再検討が必要であろう。

板付Ⅱa式新～Ⅱb式古に比定した③(図8)である。③の $2490 \pm 25$ という炭素14年代値は、前8世紀中頃、前7世紀前葉、前640～前540年頃とやはり何ヶ所も存在するが、土器型式から見て最後の前640～前540年頃に落とした。しかし下限が板付Ⅱb式古なので、板付Ⅱb式の出現年代が前550年前後だとすれば、下限は前5世紀前葉まで下っていいので、やや古く出ている可能性もある。

板付Ⅱb式に併行するとして如意状口縁部甕②(図9)と砲弾型一条甕⑤(図10)である。②の $2475 \pm 20$ という炭素14年代値は、前8世紀中頃、前7～前6世紀頃、そして前5世紀後半頃に何ヶ所もみることができる。板付Ⅱb式なので、前6世紀後半～前5世紀ごろと考えた。

⑤の $2430 \pm 25$ という炭素14年代値は、前700年付近、前7世紀中頃、前540～前410と何ヶ所も存在するが、土器型式から見て前者である可能性はなく、前6世紀後半～前5世紀末のどこかに来る可能性がある。口縁部突帯に大型化の兆しがないのでⅡb式でも古式の前500年前後の可能性が高いと考えている。(藤尾・坂本)

## V 大保横枕遺跡の消長

較正曲線上に落とした試料をみながら、本遺跡の消長を復原してみよう。

### 第Ⅰ期 居住開始 環壕掘削以前

前8世紀後葉～前7世紀前葉とした時期で、板付Ⅰ式新～Ⅱa式古段階にあたる(図11)。試料④、⑥と⑦の時期で、④が内環壕内中層、⑦が内環壕内の土坑から出土した資料である。土器はあくまでも廃棄場所で見つかるので、使用場所と一致するかどうかは別の検証が必要になるが、⑦が内環壕掘削以前に掘られた土坑という発掘所見があるので、壕の掘削以前に使用され、掘削以前に廃棄されたとみることができる。④は内環壕内の出土で、使用場所は不明である。今回測定した中ではもっとも古い型式学的な特徴をもつので、環壕掘削以前に使用されたとみてもよいだろう。したがって、3点とも環壕掘削以前の、人びとが居住を始めた時期に使用された土器で、そのうち2点は環壕掘削以前に掘られた土坑に廃棄され、もう1点は、掘削された内環壕内に廃棄されたことになる。図11で見ると、楕円形で囲んだ時期が環壕掘削以前の第Ⅰ期、ということになる。

### 第Ⅱ期 環壕掘削～機能中

先に環壕機能中の試料は、板付Ⅱa式～Ⅱb式に比定された①、②、③、⑤、⑧、⑨だが、土器型式と出土状況から4小期に分けて考えた。

第1小期は、①の板付Ⅱa式である。内環壕下層から出土しているので環壕掘削して間もない頃に廃棄されたと考えられ、前7世紀前葉ごろのことである(図12)。⑦の時期ときわめて近いので板付Ⅱa式でも古式とみることができる。

第2小期は、⑧、⑨の板付Ⅱa式新段階。いずれも環壕機能中に造られた土坑からの出土だが、⑨は内環壕と外環壕の間に造られた土坑中の出土である。前7世紀中ごろ～前6世紀中ごろに比定した。環壕機能中の前半期に使用されたと考えられる。ただし藤尾の型式認定は、いずれも板付

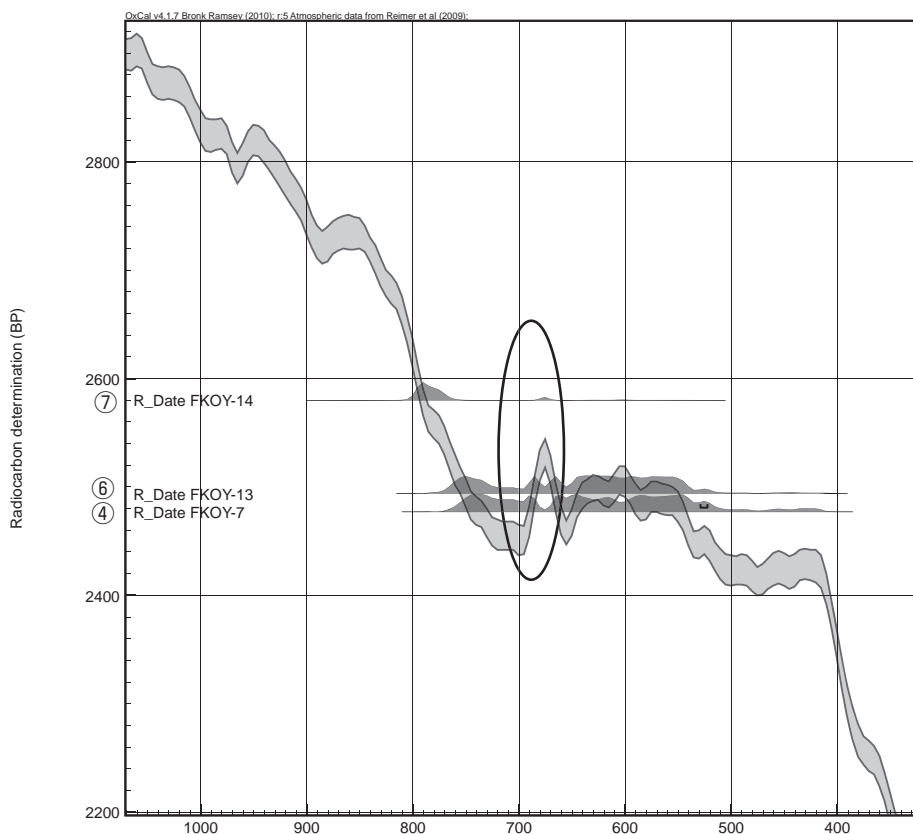


図 11 第 I 期 (居住開始, 環壕掘削以前: 板付 I 式新~ IIa 式古)

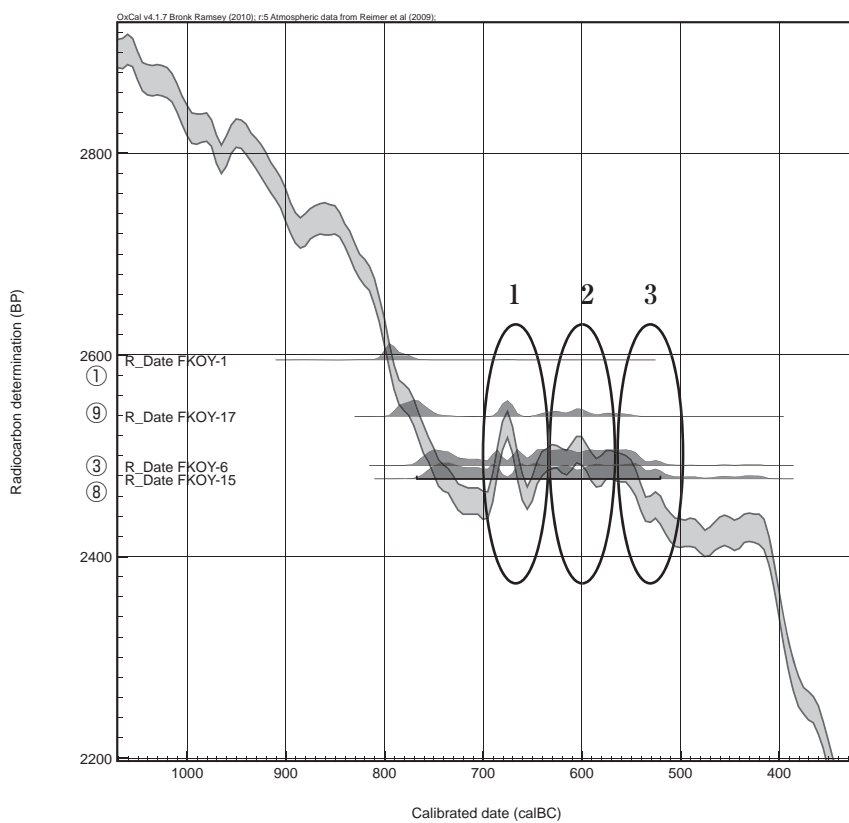


図 12 第 II 期第 1 ~ 3 小期 (環壕機能中: 板付 IIa ~ IIb 式古)

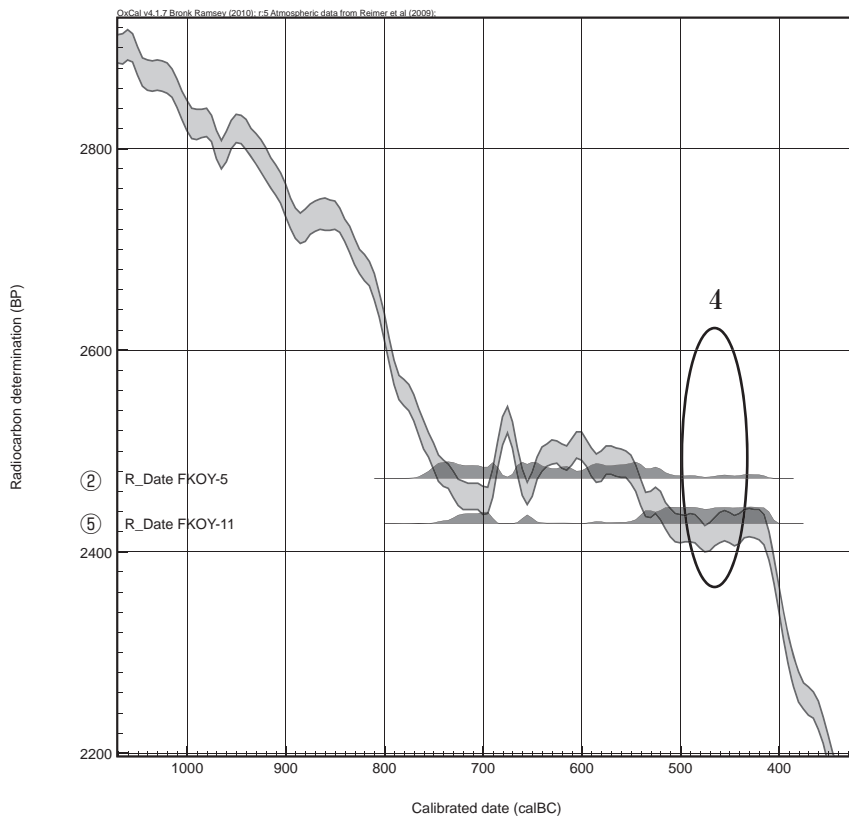


図13 第Ⅱ期第4小期（板付Ⅱb式）

Ⅱa式の古い段階なので、それだと環壕機能中の初期に使用されたことになる。

第3小期は、③の板付Ⅱa式新～Ⅱb式古段階。内環壕の下層から出土した土器で、前6世紀後半～前6世紀末ごろに比定した。較正年代の下限が板付Ⅱb式の出現年代である前6世紀中ごろで止まっていることを考えると、土器型式的には前500年前後まで下限年代が下ってもよい土器である。もしこれが認められるなら、第2小期よりはさらに下り、環壕機能中の後半期に使用された可能性も出てくる。

第4小期は、②、⑤の板付Ⅱb式と亀ノ甲Ⅱ式である。内環壕内と内環壕内の土坑から出土した土器で、前5世紀の較正年代である（図13）。環壕機能中の後半期に使用されたものである。

図14はこれまでの見解を1枚の図にまとめたものである。Ⅰ期からⅡ期の第4小期までは順に新しくなっていくことがわかる。

炭素14年代の2400年問題として年代を絞り込むのが難しいと言われる板付Ⅱa式、Ⅱb式段階だが、精度の高い発掘所見と組み合わせれば、細分も可能であることが明らかになった。統計的には到達できない結論である。（藤尾・坂本）

## Ⅵ 総合所見

今回、得られた測定値を用いて、板付Ⅱa式と板付Ⅱb式の存続幅を求めてみよう。

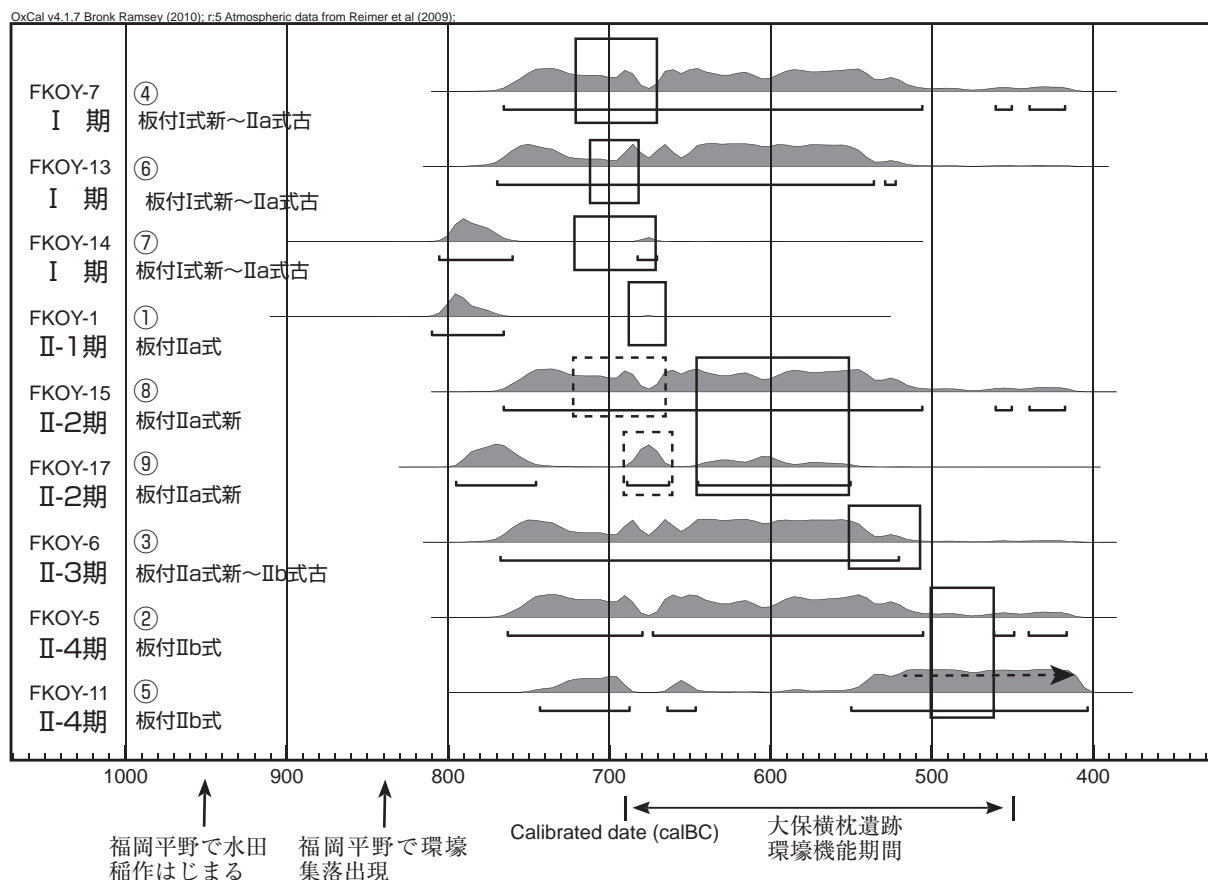


図 14 大保横枕遺跡全時期 (破線は藤尾の型式認定)

2009年の段階 [藤尾 2009] で、九州北部の板付Ⅱa式は、福岡市雀居遺跡4次調査出土の如意状口縁甕1点 (2400 ± 35 <sup>14</sup>C BP) しかなかったが、今回、大保横枕遺跡の例 (①, ④, ⑥~⑨) を加えて7例となった (表3)。これに同時期の大分平野の玉沢条里跡2例 (突帯文系)、西部瀬戸内の阿方遺跡3例 (如意状口縁甕)、熊本市山王遺跡1例 (突帯文系) を加えると、板付Ⅱa式・遠賀川系I古をあわせて15例になる。

板付Ⅱb式は大保横枕の2点 (②, ⑤) (③を除く<sup>(1)</sup>) や亀ノ甲Ⅱ式を加えて10例になった (福岡市福重稲木1点、雀居4次5点、大分市玉沢1点、鹿児島県古市1点)。よって、板付Ⅰ式と板付Ⅱa式の境界年代、板付Ⅱaと板付Ⅱb式の境界年代を求めることによって、板付Ⅱa式と板付Ⅱb式の存続幅を求めてみよう。

求め方は前稿のとおりである [藤尾ほか 2005, 藤尾 2009]。前稿では、板付Ⅱa式の出現年代を統計的に前680~前575年の間、板付Ⅱb式の出現年代は統計的に前625~前475年の間に求めた。いずれも統計的にはこれ以上、絞り込むことはできないが、日本産樹木の炭素14年代値をふまえると、板付Ⅱa式は前680~前650年、板付Ⅱb式は前550年前後に始まった可能性が高いと推測した。この年代観にしたがうと各土器型式の存続幅は、板付Ⅱa式は約150年、板付Ⅱb式は前期末の開始年代を前380年ごろとすると170年前後であった。今回はどうなるであろうか。

表3 九州・西部瀬戸内における当該期の炭素14年代値〔藤尾2009〕に追加

遺跡名	測定機関番号	炭素14年代 ( <sup>14</sup> C BP)	炭素同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ (‰)	土器型式名	資料番号	その他
板付Ⅱa式7点, 突帯文系1点						
福岡市雀居4次	MTC-08032	2400±35	(-26.3)	板付Ⅱa式	FUFJ11	
熊本市山王遺跡1次	PLD-11627	2470±20	(-26.9)	亀ノ甲Ⅰ式	KUFJ-7	胴部外面上位
大保横枕2	PLD-19945	2595±25	未測定	板付Ⅱa式	①FKOY-1	板付Ⅰ式の値だが
〃	PLD-19951	2475±25	残材なし	Ⅰ新～Ⅱa古式	④FKOY-7	口縁部外面下
〃	PLD-19957	2495±25	残材なし	Ⅰ新～Ⅱa古式	⑥FKOY-13	胴部内面コゲ
〃	PLD-19958	2580±25	-26.7	Ⅰ新～Ⅱa古式	⑦FKOY-14	胴部外面下位～中位
〃	PLD-19959	2475±25	残材なし	Ⅱa式新	⑧FKOY-15	口縁下外面
〃	PLD-19961	2540±25-	26.5	Ⅱa式新	⑨FKOY-17	胴部外面中位
突帯文系2, 中山Ⅰ式3点						
大分市玉沢条里跡7次	IAAA-41085	2480±40	-26.0	湾曲型一条甕系	FJ0449	FJ0456と同一個体
	IAAA-41088	2490±40	-26.9	湾曲型一条甕系	FJ0456	
	IAAA-40792	2410±40	-25.7	屈曲型一条甕系	FJ0452	
	IAAA-40793	2370±40	-26.4	屈曲型一条甕系	FJ0457	FJ0456と同一個体
今治市阿方3a	MTC-07841	2330±35	(-23.3)	遠賀川系甕	中山Ⅰ式 EHFJ-3	同一個体
今治市阿方3b	MTC-07842	2420±35	(-25.9)			
今治市阿方3c	MTC-07843	2370±35	(-26.1)			
今治市阿方3bre	PLD-6552	2410±25	-26.1			
今治市阿方1	MTC-07839	2350±35	(-25.6)	遠賀川系甕	中山Ⅰ～Ⅱ古 EHFJ-1	同一個体
今治市阿方1re	PLD-6550	2485±25	-27.1			
今治市阿方2b	MTC-07840	2300±35	(-24.1)	遠賀川系甕	中山Ⅰ～Ⅱ EHFJ-2	同一個体
今治市阿方2bre	PLD-6551	2470±20	-26.9			
板付Ⅱb式6・突帯文系4点						
福岡市福重稲木2次	PLD-9657	2480±25	(-26.8)	砲弾型一条甕	亀ノ甲Ⅱ式 FUFJ-53	
福岡市雀居4次	MTC-08033	2415±35	(-24.5)	如意状口縁甕	FUFJ-18b	
	MTC-08034	2360±35	(-24.3)	如意状口縁甕	FUFJ-19b	
	MTC-08036	2400±35	(-25.2)	如意状口縁甕	FUFJ-21b	
	MTC-08040	2430±35	-19.0	如意状口縁甕	FUFJ-31b	C <sub>4</sub> 植物か?
	MTC-08041	2400±35	(-26.1)	如意状口縁甕	FUFJ-36a	同一個体
	MTC-08042	2385±35	(-25.4)		FUFJ-36b	
大保横枕2	PLD-19949	2475±20	-26.7	如意状口縁甕	②FKOY-5	内面胴部下位～底部
	PLD-19955	2430±25	-27.2	亀ノ甲Ⅱ式	⑤FKOY-11	胴部外面中位
大分市玉沢条里跡7次	IAAA-41084	2450±40	-25.6	砲弾型一条甕	亀ノ甲Ⅱ式, FJ0448	
鹿児島県川辺町古市	IAAA-30254	2380±50	(-27.3)	二条甕	高橋Ⅱ式 FJ-0004	

( )内の数字はAMSによる測定値



図 16 九州北部の土器型式別炭素 14 年代 (2012 年作成, グレーの部分は  $^{14}\text{C}$  の上限と下限値の範囲)

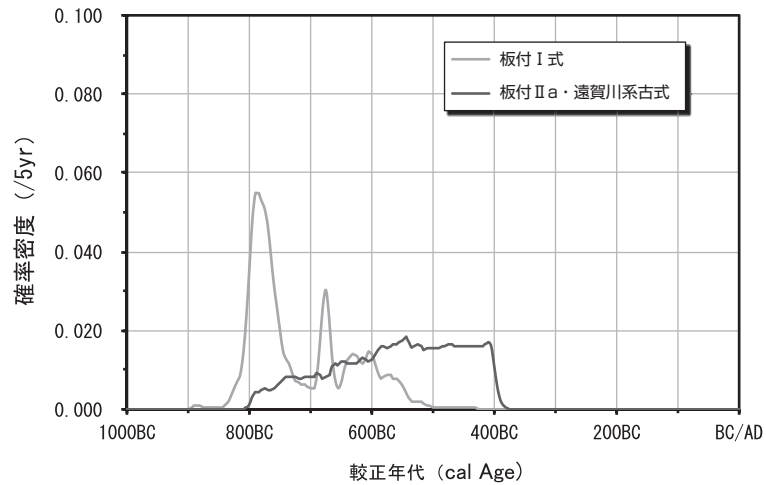
統計処理の結果、板付Ⅱa式の出現年代は、前720～前595年の間（瀬戸内を除くと前750～前600年になる）（図17）、板付Ⅱb式の出現年代は前655～前510年の間（瀬戸内を除くと前690～前555年）（図18）であった。板付Ⅰ式新が3点加わっていることが前720年まで上限年代を押し上げているとしたら、前稿どおり、前700年ごろと見ておいた方がよいのかも知れない。

Intcal09の炭素14年代値をふまえてそれぞれの上限年代について考えてみよう（図16）。

図16は今回の試料を加えて、九州と西部瀬戸内の弥生前期初頭から中期後半までの土器型式ごとの測定値（上限と下限）を表したものである。薄いグレーの四角は各型式の測定値の幅（上限と下限とその炭素14年代値）。大きな数字は型式ごとの測定値の数である。たとえば板付Ⅱa式であれば、7点の測定値があり上限が2595  $^{14}\text{C}$  BP、下限が2400  $^{14}\text{C}$  BPという意味である。もちろん型式学的な併行関係に変化はなく、併行する型式同士は同じ測定値をもつ。2009年段階では板付Ⅱa式段階の測定値が1点だったので、測定誤差も縮まっている。

環壕が掘られる前の第Ⅰ段階、板付Ⅰ式新～Ⅱa式古に比定されている④、⑥と⑦は前700年を前後する時期（前720～前680年）ごろに位置した（図15）。これによって板付Ⅰ式新とよばれている段階が前8世紀末～前7世紀初頭にあたる可能性があり、板付Ⅱa式の上限も700年ごろにくるとみてよいだろう。これまで西日本における弥生稲作の始まりは高知だけが前8世紀にさかのぼる可能性があると考えてきたが、これで大分平野や西部瀬戸内でもほぼ同じ時期に水田稲作が始まっていたと考えることができるようになった。

板付Ⅰ式 > 板付Ⅱa・遠賀川系古式

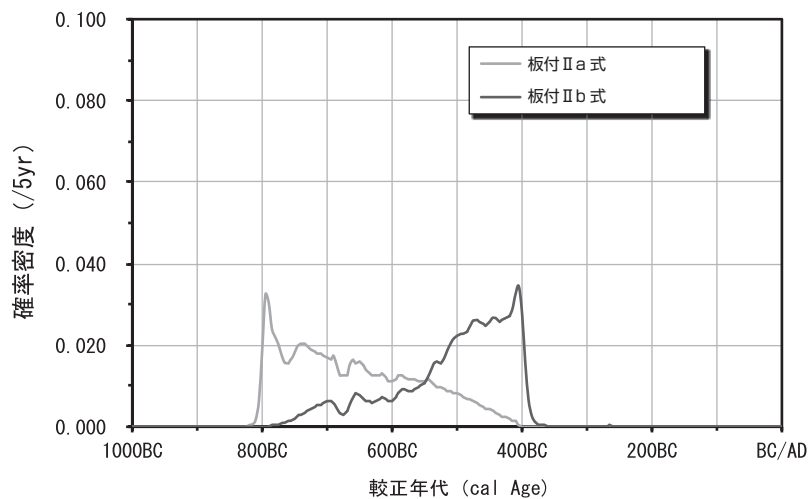


解析結果

	開始条件=0.10	終了条件=0.90
板付2a	800BCより	595BCまで
板付Ⅱa・遠賀川系	720BCより	425BCまで

図17 板付Ⅰ式とⅡa式の型式間境界 (2012年作成)

板付Ⅱa式～Ⅱb式の境界



解析結果

	開始条件=0.10	終了条件=0.90
板付2a	785BCより	510BCまで
板付2b	655BCより	410BCまで

図18 板付Ⅱa式とⅡb式の型式間境界 (2012年作成)



---

環壕が掘削される第Ⅱ期は前7世紀前葉（前675年）ごろで、板付Ⅱa式に比定されている①が相当する。板付Ⅱa式新に比定されている⑧と⑨は、前600～前550年ごろに比定される。環壕の最終段階をⅡ-4期とした⑧と⑨は、前5世紀前半である。

板付Ⅱb式の上限年代は、従来どおり、前550年ごろで問題はないと考える。（藤尾・坂本）

---

#### 註

---

(1)——下限年代が古く出ている③は、計算から外した。

---

#### 参考文献

---

- 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘 2005.9 「弥生時代の開始年代—AMS—炭素14年代測定による高精度年代体系の構築」(『総研大文化科学研究』 pp.71-96)
- 藤尾慎一郎 2007.3 「土器型式を用いたウィグルマッチ法の試み」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集, pp.157-184)
- 藤尾慎一郎 2007.5 「弥生時代の開始年代」(『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻, pp.7-19, 雄山閣)
- 藤尾慎一郎 2007.5 「九州における弥生時代中期の開始年代」(『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり第2巻, pp.45-51, 雄山閣)
- 藤尾慎一郎 2009.3 「弥生時代の実年代」(『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代の始まり第4巻, pp.9-54, 雄山閣)
- 山崎頼人編 2012 『大保横枕遺跡2』小郡市文化財調査報告書第260集

藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館研究部）

山崎頼人（小郡市埋蔵文化財調査センター）

坂本 稔（国立歴史民俗博物館研究部）

（2012年12月7日受付，2013年3月26日審査終了）